

ふるさと、風

第67号 (2011年12月)

風に吹かれて (46)

白井啓治

『真つ赤な烏瓜に情熱の年を振り返る』

いろいろなことの起った2011年であった。特に東日本大震災による津波被害は東北地方の沿岸に未曾有の被害をもたらした。また日本列島を襲った集中豪雨による被害も甚大であった。しかし、こうした自然災害というのは、地球という星に生きている以上は回避することのできない想定内の出来事、現象である。マグマ玉の表皮の上に暮らしているのだから、地震だの火山の噴火などはどこであっても不思議ではないのだ。

しかし、この現実を無視した我欲による人災には腹が立つし、我欲を通すための想定外などの中には聞く耳は持ちたくない。自然災害とその後に発生した人災に対して天罰と言って顰蹙を買った者が居たが、それを非難する者は天に唾を吐くようなものである。

こんな時にこそしっかりとしなければならぬ政治にも我欲が蔓延していて、想定しない、したくないことだらけで、それに対する天罰が下されようとしている。まったく救われねえーな、である。

11月末の事であった。散歩のときに真つ赤な烏瓜を見つけた。烏瓜といえは夕焼け色とばかり思っていた小生には大変な発見であった。いつまでも冬の寒さがやってこない温暖化の異変かと思つた。これは一大発見とばかりにブログにそのことを書いたら、早速その翌日、知人のブログに真つ赤な烏瓜は南の原産で、関東の元々は北原産のもので、普通は夕焼け色だと教えて頂いた。

真つ赤な烏瓜の発見は、今年の小生の情熱の締めくくりのようであった。この一年を大きく周りをみると救われぬような一年であったが、自身を振り返ると、実に嬉しく、愉快な一年であった。

特に美浦村の方々との交流が生まれ、当会報にご投稿いただけるようになったことは一番の喜びといつてよい。美浦村の方々との本格交流は、美浦村の市民劇団「宙の会」を主宰する市川紀行さんとの面識がきっかけで、市川さんが会長を務めている「陸平をヨイショする会」が主催する縄文の森コンサートに「ことば座の朗読舞」が招かれたことに始まった。

この縄文の森コンサートでは、モダンバレエの柏木久美子さん(イトウ同門会長)とことば座の小林幸枝との舞のコラボレーションが実現した。舞台音楽は、ことば座ではもうすっかりお馴染み

になったオカリナ奏者の野口喜広さん、パーカッション&キーボードの矢野恵子さんが担当し、舞台背景は当風の会の兼平ちえこさんの「常世の国の五百相」が装美された。

縄文の森コンサートで実現したコラボレーションは、舞台表現の世界では初めての試みであった。いわゆる世界で初めての舞台が創られたのである。この「ふるさと風の会」が掲げている「ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える」の大きな実行動であった。

この縄文の森コンサートへの出演が縁で、モダンバレエの柏木久美子さんとは、ことば座の6月公演に再び小林の手話を基軸とした舞とモダンバレエのコラボレーションが、野口さんの音楽と兼平さんのことば絵とが一体となって創造することができた。

そして、このニュー・コラボレーションの表現活動が更に新展開を見せはじめ、柏木さんを通して来年の夏には香港公演という話が持ち上がってきており、今具体的に進みつつある。三月には香港公演への前哨戦としての公演が企画され、今その台本執筆に頭を悩ませている。実に創造的な展開で、愉快なことである。

創造的愉快を思うとき小生は何時も一休宗純の「自力たれ」ということを思い出す。ひたすら念仏を唱える他力本願の真宗全盛の中で、現世に生きるのならば常に自力たるべし、とそれを貫き通した一休宗純こそ愉快の最高であろうと。

このふるさと風も、そのスタートはふるさとお興であった。しかし、興そうと考えるならば自力で変わらなければならないのであるが、変わることに拒絶を示し、都合の良い他力本願

を取り入れてしまう。先月号のヨイシヨの会の市川さんの原稿ではないが「待つのはゴドーだけ」にしなければならぬのである。変わるとは、未踏の界に足を踏み入れることなのだから、他力ではなく自力たれなのである。

先月、世界で一番幸福度の高い国、ブータンの国王夫妻が来日され、国中を沸かせた。そのブータンでは、毎年(?)だったか幸福度調査というものをしていのだそうだ。その調査項目の第一に挙げられている質問が「あなたは郷土の民話を知っていますか」だそうである。この会報の前身である「ふるさとルネサンス」が始まるときに、伝承民話というのはふるさとの暮らしの知恵と話した。そして、ふるさとに伝承民話が一つなくなる(忘れられる)ということは、ふるさとに暮らしが一つなくなることを意味する、と話したのであったが、幸福度世界一の国の幸福度調査の一番目が「郷土の民話を知っていますか」というのは、実に面白いことである。

さてさて、2011年もあと20日ほどで終わるが、来年も「自力たれ」を胸にしつかり抱いて自己責任で言いたい放題に歩いていきたいものである。

軍国少年M

鈴木健

日中戦争が始まったのは1937年7月7日、軍国少年Mが小学校に入った年だった。はじめて渡された国語の教科書を開くと、まず、サイトサイタ サクラガサイト、つぎが、コイコイシロ

コイ、続いて ススメ ススメ ヘイタイスメ、そして、ヒノマルノハタ バンザイバンザイ だっ
たか。音楽で一番先に思い出すのは、この歌。

桃太郎

一 桃太郎さん桃太郎さん

お腰につけた黍団子

一つわたしに下さいな。

二 やりましょうやりましょう

これから鬼の征伐に

ついて行くならやりましょう。

三 行きましよう行きましよう

あなたについて何処までも

家来になつていきますよ。

四 そりや進めそりや進め

一度に攻めて攻めやぶり

つぶしてしまえ鬼が島。

五 おもしろいおもしろい

のこらず鬼を攻めふせて

分捕り物をえんやらや。

六 万々歳 万々歳

お伴の犬や猿雉子は

勇んで車をえんやらや。

歌の狙いなど知る由もなく、おもしろがつて歌っていたが、今思うと恐ろしくなる。鬼がどんな悪いことをしたかではなく、とにかく鬼だから悪い。悪い鬼だから攻めほろぼす。犬猿雉子を手なづけて海を渡り、おもしろがつて富を奪いつくす。日本が桃太郎であり、お前たちも桃太郎のような人になれ。ということではなかったか。これが文部省唱歌だ。鉢巻を締め、日の丸の扇子を掲げ、背中に「日本一」の旗差し物を立てていた桃太郎が記憶に残る。おまけにご丁寧にも、幼稚園で「モ

モタラウ」というジュニア版でリハーサルをして

いた。カナも読めない子どもに歌で思いこませて

いたのだ。正当な理由を付けられない戦争に国民

を動員しようとするあせりとしか思われない。し

かし、純真な子どもたちは、歌の狙いなどするよ

しもなくおもしろがつてうたっていた。そして、

しらずしらずに他国への侵略が悪いとは思わない

意識が心の深層に刷り込まれていったのである。

二年生では「おおえやま」。大將が天皇の命令で鬼

を退治に行く。だまし討ちで皆殺しにするのだ。

殺人や略奪を繰り返す悪い鬼をこらしめるために

海外に進攻するのであって、財産や資源は目当て

ではない。天皇の軍隊は悪いことはしない。今度

は、あくまでも正義破邪の進軍である。

幼稚園では「へいたいさん」もよく歌った。

一 鉄砲かついだへいたいさん

足並みそろえてあるいてる

とつとことつとこあるいてる

へいたいさんはきれいだな

へいたいさんはだいすきだ。

二 おんまにのつたへいたいさん

すなをけたててかけてくる

ばっぱかばっぱかかけてくる

へいたいさんはいさましい

へいたいさんはだいすきだ。

一、二年では「日の丸の旗」もしょっちゅう歌わ

された。

一 白地に赤く日の丸染めて

ああうつくしや 日本の旗は。

二 朝日の昇るいきおい見せて

ああいさましや 日本の旗は。

軍国少年には、兵隊も日の丸もイサマシかったが、

先生はさらに、兵隊さんはキレイで、日本の旗はウツクシイと歌わせ、教え込む。かくて、少年Mはどういうものをキレイやウツクシイとするのかわからなくなっていた。「大きくなったらなにになる？」男の子の返事は「兵隊さん」。

そして、1937年12月13日の南京占領。町民は狂気して沸きかえり、少年たちも手に手に日の丸、旗行列。学校での図画の時間といえば、自分のあいだ誰もが、城壁の上でイサマシイ日の丸の旗をつけた銃剣を高くとかかげ万歳をするイサマシイ兵隊さんを書いた。日の丸の下で、城門の中で、なにが行われたかは、知る由もないまま。それを知らされたのは終戦後のこと。銃声と悲鳴の効果音で始まるNHKの「真相はかうだ！」というラジオ番組によってだった。38年10月には漢口陥落。こんどは提灯行列だ。学芸会では「肉弾三勇士」、「ああ血の伝令」。

1941年12月には、今までの中国に加えて、アメリカ、イギリスにも戦争をしかけるに至る。その地ならしか、その年の4月、小学校は国民学校にかわり、2年生の修身（社会）の教科書「ヨイコドモ（下）」に「日本の国」、唱歌の教科書「ウタノホン（下）」に「日本」が登場した。どちらも同じ文面だった。

日本 ヨイ 国

キヨイ 国。

世界二一ツノ

神ノ 国。

日本 ヨイ 国

強イ 国。

世界二 カガヤク

エライ 国。

日本は世界にただ一つ、神の子孫が治める、ヨイ、キヨイ、ツヨイ、そしてエライ国である。だから世界を従える資格がある。終戦の年までの4年間、2年生の頭に繰り返し繰り返し叩き込んだのだ。

2000年5月に森総理大臣は神道政治連盟国会議員懇談会で「日本の国はまさに天皇を中心としている神の国であるぞということ国民の皆さまにしつかり承知していただく。その思いでわれわれが活動して30年になった。」と挨拶した。このような組織があったとは驚きだったが、国民学校2年で教え込まれたことが、55年たつても彼の頭には焼きついたままになっていたのではなからうか。教育の力はおそろしい。

前後するが、日中戦争がはじまると、軍国少年たちは頻繁に戦争に行く兵隊を見送った。そのときの愛唱歌が、

○天にかわりて不義を討つ、忠勇無双のわが兵は、歓呼の声に送られて、今ぞ出で立つ父母の国、勝たずば生きて帰らじと、誓う心の勇ましき。（日本陸軍 日露戦争時につくられた）

○勝つて来るぞと勇ましく、誓つて故郷（くに）を出たからは、手柄たてずに死なうようか、進軍ラッパ聴くたびに、臉に浮ぶ旗の波。（露

宮の歌）

○わが大君に召されたる、命栄えある朝ぼらけ、讃えて送る一億の、歓呼は高く天をつく、いざ征けつわもの、日本男児。（出征兵士を送る歌）であった。戦場に出て行く兵士を駆で見送る時に、日の丸の旗の波に合せて声を限りに歌ったものだ。

「わが大君に召された」ことはこの上のない名譽であったが、それは表向きのこと。どこの家でも普段の会話では「兵隊にとられた」と言っていた。それとは知らぬ少年たちは、授業が終わると、出征ごっこ、「00上等兵いつてまいります」。兵隊ごっこ、「やられたつ、天皇陛下万歳！」。

兵隊に行く若者は死を覚悟させられていた。

○白地に丸のくつきりと、正しく強く美しい、何のしるしの紅か、燃ゆる正義をかたどった、げにこの御旗の下にして、男児は笑みて死ぬるなり、むかしも今も後の世も（日章旗の下に）やがて、遺族の胸にいだかれながら汽車から降りてくる白木の箱を出迎えることも多くなる。

文部省が作成した初等科4年生用の音楽教科書につきの歌がある。

無言のがいせん

一 雲山万里をかけめぐり

敵を破ったをじさんが

今日は無言で帰られた。

二 無言の勇士のがいせんに

梅のかをりが身にしてみる

みんなは無言でおじぎした。

三 み国の使命にぼくたちも

やがて働く日が来たら

をじさんあなたが手本です。

文部省が4年生のこどもに死を予約させたのだが、当の少年たちもそのときを待ち望んでいた。

少年Mが5年生になると、毎週のように「日米戦始まらば」という綴り方を課せられた。そして、12月8日、本誌が上梓される日か。ちょうど70年前のこの日、天皇の対米英宣戦布告詔書が発表された。その日にちなんで、以後毎月8日は大

詔奉戴日ということで朝礼。日の丸掲揚 君が代斉唱、宮城遙拝、詔書代読。また、日常、「おそれおおくも」とか「かしこくも」という言葉を聞く、だれでも、どこにいても直立不動。必ず、「天皇陛下におかせられましては」という言葉が続くからである。「鬼畜米英撃滅」が合言葉。中学に入ると、各校に配属されている陸軍の将校に木銃で敵を突く訓練などを指導された。また、勤労奉仕と言って働き手を兵隊にとられた農家の手伝いをした。お昼にはじやがいもの家もあったが、白米のお握りの家に当たると大喜び。

戦争が終わる数ヶ月前には次の歌が「国民合唱」としてNHKラジオで歌唱指導された。

勝ち抜く僕ら少国民

天皇陛下の御為に

死ねと教えた父母の

赤い血潮を受けついで

心に決死の白だすき

かけて勇んで突撃だ。

(勝ち抜く僕等少国民)

あのほのぼのとした「里の秋」には、「大きく大きくなつたなら 兵隊さんだうれしいな ねえ母さんよ 僕だって 必ずお国を守ります。」という4番があった。そのころMは中学3年生、「花もつぼみの若櫻、五尺の命ひっさげて、国の大事に殉ずるは、われら学徒の面目ぞ、ああ紅の血は燃ゆる。あとに続けと兄の声、いまこそ筆を投げ打って、勝利ゆるがぬ生産に勇み立ちたるつわものぞ、ああ紅の血は燃ゆる。」(ああ紅の血は燃ゆる)。やつと、国に尽くす時が来たかと、喜び勇んで、体育館を改造した学校工場で飛行機のネジ作り。鉄材を削

る時に使う切削油が、旋盤に向かう体全体にはね掛かる構造になっているので、一日で頭から足まで油べとべと。帰宅して風呂に入り、職場からこつそり持ち帰った練り石鹸(粘土に粉石けんを混ぜたもの)で洗うがどうしようもない。衣類はスフという素材で、洗うと切れてしまう。夜勤で帰宅するころはきまつて警戒警報や空襲警報。風呂釜は光が見えないようにと蓋をするが、それでもすきまから炎が見え、外からは、「Mさん明るいですよ」。急いで水をかけて消火する。食事も真つ暗のなか。おかずは干した芋がらの塩ゆでくらい。アクが強くて飲み込むときにノドがいたくなるが、がまんするほかはない。真つ暗でも、箸の先に手ごたえがあるので、つまむことはできるが、口に入れるのはたいへん。鼻の穴に持っていたこともあった。「欲しがりません勝つまでは」が合言葉。弁当は、代用食として配給になるジャガイモや乾燥サツマ、カボチャを麦飯に炊き込んだもの。梅雨があけると、ジャガイモご飯は昼には糸を引いて臭くなり、味もないので食べにくい。カボチャやサツマの炊き込みは味があるので、おかずがなくてもたべられた。飼っていた兎は野良犬集団のなぐりこみに遭った。垣根に大きなカボチャが一つ、これがあれば食糧が底をついても3日は大丈夫と思っていたその夜に盗まれた。まだ学校に近かったからよい。自転車で真つ暗闇を一時間かけて帰る友もいた。入梅の泥んこ道、タイヤやチューブが劣悪なのでパンクは日常。チューブのかわりに麦わらを詰めている友。暗闇で道がわからず、田んぼにつっこんだり電柱に衝突した友。校庭では本土決戦に備えて、剣道場に駐屯した鉄砲のない

兵隊が戦車に見立てた荷車への特攻訓練。その外

野は先生たちの芋畑。神社の境内では女性たちのパラシュートで降下する米兵を下から突く竹槍訓練。茨城は、西・北関東、甲、信、越に向かうB29の編隊の通り道だったので、入れ替わり立ち代り一晩中、空一杯にゴウゴウと響き通し。昼間はF6FトムキャットやP51ムスタングという戦闘機が超低空で走り回り、気まぐれに機銃掃射をかける。水戸の市街地は丸焼け。やがて、日立・勝田への1トン爆弾攻撃や艦砲射撃の不気味な地鳴り音が聞こえてきた。それでも、大本営発表を信じ、

丘にはためくあの日の丸を

仰ぎ眺める我らの瞳

いつかあふるる感謝の涙

燃えて来る来る心の炎

我らは皆 力の限り

勝利の日まで 勝利の日まで (勝利の日まで)と歌いながらお互いを励まし合っていた。

終戦直近には、情報局制定の「意気壮んなり大八州陛下の赤子拳り立つー」(国民義勇隊の歌)が国民合唱としてNHKラジオで流された。先の「ああ紅の血は燃ゆる」も愛唱歌であったが、やがて、本土決戦、一億玉砕の決意を求める荘重悲痛な歌に変わる。

おお止み難き若人の 怒りに燃えて振る槌

に 敵撃滅の響きあり。ああ受け継ぎしこの

腕(かいな) 鍛え鍛えし大和魂 いざ決戦を挑

みなん。学徒我ら 学徒我ら すめら御国と

ともに行かん。ーーああ倒るるもなお起

ちて 七生(ななむ)に誓う大和魂 いざ決戦

を勝ち抜かん。学徒我らー (いざ決戦の秋来

る) 記憶曖昧

「勝利の日まで」とがんばっていたが、なにも知

らされないまま天皇の無条件降伏放送。「国のため」「大君の御為に」、「天にかわりて不義を討つ」、「日の丸を揚げて築く新アジア」、「正しき平和打ち立てん」などというのは一体何だったのか。呪縛が解けたのは、46年1月1日のいわゆる「**天皇の人間宣言**」によってであった。

「朕ト爾等（なんじら）國民トノ間ノ紐帯ハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ、単ナル神話ト伝説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延（ひい）テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノに非ズ」。

53年10月22日、池田（勇人・後の総理）ロバートソン（國務次官補）会談で、「日本政府は、**教育**および**広報**によって日本に**愛国心**と自衛のための自発的精神が成長するような空気を助勢することに第一の責任をもつ」と共同声明。

2004年11月3日、石原都知事に任命された米長邦雄都教育委員は、園遊会の席で天皇に「**日本中の学校で国歌を斉唱させることが私の仕事で「ございます」と挨拶。天皇は「やはり、強制になるということではないことが望ましい」と述べられた。まさにそのとおり、愛国心を強制するのは下心があるからにほかならない。**次世代に「いつか来た道」を歩かせたくないというの、かつて軍国少年だったMの願いです。

ノーベル賞「ぼれ話」(2)

菅原茂美

2011年のノーベル賞受賞者名簿に、日本人

の名が一人もなかったのは誠に残念である。

前月号では、私の関心が強い「生理学・医学賞」について縷々述べた。今回「樹状細胞」関連3氏の受賞は、免疫の基本をなす研究で、1973年の発見からは、38年も経過している。

ノーベル賞は、どんな優れた業績でも、生存者でなければ、授与しないことになっている。

さて1983年の生理学・医学賞受賞者は、米国のマクリントック女史であった。トモロコシの黄色い列の中に、白い実がトビトビに点在することにヒントを得、遺伝子は染色体の間を、ピョンピョン飛び跳ねて移動することを発見し、報告した。しかし当時遺伝子は全く動かない：というのが定説であり、学会は女史の学説をつま弾きにした。20年以上も無視された学説は、やっと多くの支持者が現れ受賞の運びとなった。高齢受賞の感想を求められた女史は「ノーベル賞を貰うコツは、長生きすることです」と述べたという。

さてノーベル賞授賞にあたっては、誤った業績に対し、選考委員会がそれを見抜けず、授与した過去の苦い経験がある（寄生虫により「がん」が発生するとした研究に授与）。それ以来、どんな優れた業績でも、ある年数を経て、世界の誰もが認める、絶対的に確定した理論でなければ、授与しないという最近の傾向がある。

そう言われてみれば、京都大学山中伸弥教授の「**IPS細胞**」は、2007年11月21日の発表である。再生医療で人類を救う最高級の研究ではあるが、まだ4年しか経っていない。いかに日本人の期待が大きくとも、今回の授賞は見送られて、やむを得なかったのかも知れない。

【再生医療】とは、事故や病気で身体の一部を

失ったり、傷つけたりした時、生きた細胞から、人為的に細胞・組織・器官を再生させて、その機能を回復させようとする治療法である。皮膚・臓器・骨など身体のある部分の対象となる。

【**IPS細胞**】（人工多能性幹細胞・新型万能細胞ともいう）は、ヒトの皮膚細胞に遺伝子操作を加え、さまざまな細胞に育つ能力を持つ。山中教授の「**IPS細胞**」は、受精卵から作る**ES細胞**（胚性幹細胞）に比べ、倫理的な問題もなく、患者自身の細胞から作るため、拒絶反応を起こす心配もない。そのため、創薬や細胞移植療法での利用が期待されている。】

* * * * *

さて今月は生理学・医学賞に次いで、私の関心が深い物理学賞受賞内容について触れてみたい。

2011年ノーベル賞（物理学）受賞者名簿

- ① ソール・パールマッター 上級研究員（52）
米ローレンス・バークレー国立研究所
- ② ブライアン・シュミット 特別教授（44）
オーストラリア国立大学
- ③ アダム・リース 教授（41）
米ジョンズ・ホプキンス大学

1997年、「宇宙の膨張は加速している」と、以上3氏が唱え、世界を驚かせた。それまで宇宙は、膨張してはいるが、そのスピードは現在、減速しているというのが世界の常識であった。

宇宙の膨張速度は、地球から銀河などが遠ざかる速さで調べる。地球から遠くの銀河で「**超新星爆発**」があると、一定の光を放つ為、その明るさ（標準光源）を測定すれば、その星までの距離が分かる。距離がわかれば、光源が地球から遠ざかるスピードが計算できる。受賞メンバーは、50個

の超新星を手がかりに、その銀河が地球から遠ざかる速さを測定し、宇宙が広がる速さを割り出した。その結果、宇宙の膨張速度は、今から70億年前までは、比較的緩やかなスピードであったが、その後、急にスピードを上げて膨張を続けていると発表した。それまで宇宙の年齢は100億年ぐらいいと言われていたが、膨張速度を逆算していくと、ビッグバンが起きたのは、理論上137億年前ということになる。

【超新星爆発】…星の進化の最終段階における大規模な爆発現象で、一つの銀河に匹敵するほどの明るさを放って、星は死ぬ。

現在の太陽系は、その付近で先代の恒星が超新星爆発を起こして死んだ燃えカス（ガスと塵芥からなる星間物質）が起源である。その星間物質が原始太陽系星雲となり、密度の最も高い中央の物質が「原始太陽」（ほぼ50億年前）となり、層状に回転する星雲の比重の重い物質は、太陽の近くに回る内惑星（岩石惑星即ち、水星・金星・地球・火星）となり、比重の軽い外縁部の星間物質は、ガス球となり、木星・土星など外惑星となる。地球は46億年前に誕生した。（惑星に成長し損ねた直径400以上の岩石片が2011年11月9日、月の軌道内32万kmまで地球に大接近した。この程度の小惑星の接近は35年ぶりとのこと。6500万年前直径10kmの小惑星衝突は、恐竜を滅亡させた。）

そして、約50億年前に誕生した太陽は、中心部で、核融合による外向きの力と、自己の重力による内向きの力がつりあい、現在安定状態となっている。しばらくこの状態が続くと、核融合燃料の水素を使い果たすと、ヘリウムの核融合が始まり、我が太陽は、「赤色巨星」（寿命5億年）へと

進化する。最終的には地球ぐらいの大きさの「白色矮星」となって、100億年の生涯を閉じる。】

さて、この加速する宇宙膨張の原動力は何か？ ということになる、新たな謎が生じる。

星や銀河同士は、当然その引力が働き、お互い引き合って、縮まるのが本来の姿である。それが逆に反発するかのごとく両者は、「斥力」により、離れて遠ざかっていく。その引き合う力に反発して宇宙を押し広げる力を考えなければならぬ。その正体不明の力を「暗黒エネルギー」と呼ぶ。

ではその、万有引力の法則では説明のできない、銀河同士の「はじき合う力」斥力は、一体どこからきているのか？

現在分かっているのは、宇宙には、現在の科学（電磁波・光・電波・X線などによる観測）では、はつきり捉えることができない・何者かによって、次の3つの宇宙の運動は、支配されている。

①銀河の回転速度。銀河は中心の周りを外縁部でも速度を落とさず、即ち地球から電磁波などで観察できる物質の質量だけでは、これだけの速度で回転はできないのに、ものすごい速さで回転している。その理由は、その銀河の90%は見えない物質により振り回されていると考えられている。

②銀河団の存在。銀河は集団を作り、銀河団を構成している。何十億年も前に形成された銀河団は、今頃は、遠心力で、ばらばらになっているはずだが、今なお団結しているということは、銀河団の中に、離散させない大きな見えない質量が90%も存在しなければならぬ計算となる。

③インフレーション理論。宇宙誕生のごく初期のうちには、宇宙はものすごいスピードで膨張した。宇宙の物質分布が、今のようにならなるために

は、現宇宙の99倍の見えない物質の質量がなければならぬ。

以上3つの理由から、宇宙には電磁波などでは観測できない「暗黒物質」と呼ばれる未知の巨大な引力を持つ質量が存在する。存在する証拠としては、「宇宙背景放射の揺らぎ」や「重力レンズ効果」や「大銀河を周回する小銀河軌道のずれ」などが、間接的証拠と言われる。

いづれにしても、暗黒物質が宇宙の構成要素の一つであることは間違いなく、現在その割合は、星や星雲など目に見える物質は全宇宙のわずかに4%、目に見えない暗黒物質が23%、残り73%は「暗黒エネルギー」と呼ばれる未知のエネルギーである。この暗黒エネルギーが、宇宙の膨張を加速していると考えられている。

【暗黒物質や暗黒エネルギーの正体は、宇宙が膨張する過程で取り残された「素粒子」であると考えられる。それは電磁波で観察可能な荷電粒子ではなく、電氣的に中性で殆ど他の粒子と相互作用をしない「巨大な質量の素粒子」と考えられる。】

アインシュタインは、宇宙の大きさは不変であると考え、宇宙が縮まないよう、或いは拡張しないよう一定の大きさを保っているのは、重力に對抗して働く力があると考え（1916年）相対性理論の「重力場の方程式」に【宇宙項】を加えた。

ところが1929年、エドウィン・ハッブルは、遠方の銀河からの光のスペクトルは、すべて赤方偏移（地球からの距離が遠くなるほどスペクトルは赤い方に偏移）することを発見した。これは、やがて登場するビッグバン理論に実証的根拠を与え、遠くの銀河ほど速い速度で遠ざかることを示している。アインシュタインは、このように宇宙

は定常ではないことが証明されると、「宇宙項」を加えたことを「人生最大の誤り」と悔やんだ。

だが、今まさに、この宇宙項に相当する「斥力」が存在することになり、重要な研究テーマが帰りを俟たされられる。

* * * * *

さて話題を替え夜空には【**八十八の星座**】がある。冬の夜など、満天の星空を仰ぐと美しい星座が輝き、私の如き無粋な男でも、ロマンチックな気分を誘われる。そのまま果てしなき宇宙に思いを馳せ、ギリシャ神話や、古代中国の天の川兩岸の牽牛星・織女星物語に、しばし没我の境地に浸るなら、私も心穏やかな庶民ということになろう。ところが持つて生まれた気性。すぐ「星座とは何ぞや」？と、ごんぼ堀りが始まる。

夕しぐれの後、綺麗に浮かぶ「虹」を見たら、黙ってその美しさに見とれていたらよい。俳句の一つも作ればよい。それなのに、文学に疎い私は、すぐその「波長」の屈折を考え、七色を分析し、主虹から離れた外側に色の順を逆にした副虹の存在に「なぜ？」・「どうして？」が始まる。月の光で出る虹は「月虹」というが、ぜひ見たいものだ。

【空軍のパイロットなど自慢げに、『私はジェット機で、あの「虹」をくぐり抜けた事がある』と法螺を吹く。太陽の光が、水滴に40〜42度の反射角で戻ってきたのが「虹」のわけで、自分はその下を通過する時は、反射角は直角近いので、そこに虹が見えるわけがない。】

街角で美女を見たら、黙ってその美しさに見とれていたらいのに、すぐ彼女は北方系縄文人の末裔か？とか、あの白い肌のDNAも、起源はアフリカなのにと、臭覚の劣化した人類は、

キリリと締まった細いウエスト(すがり(蜂)腰)で、我らオスに、視覚で魅力を訴えている野生の名残なのか？などと余計なことを考えてしまう。

美人さんよ！オスにはすぐ行動を起こす変態もいれば、行動は起こさないが、あらぬ考えに没頭する変人も多数いる。もつとも、それを計算に入れ、挑発してくるレディも多数いるけどね。

【雑学1・この世で一番「勇氣」のあつた人は、人類で初めて口紅を塗った女と、西瓜を食べた男。雑学2・昔、パリやロンドンの社交界では、貴婦人達が、一番下の肋骨を、外科切除してまで、ウエストを細く見せ、殿方を魅了したという。

雑学3・女体美は神が創つたものだが、サラブレッドは、人間が創つた最高の芸術作品。】

細腰讃歌も度を超すと、それには縁遠い、我が女房に叩き出されそうだからこの辺で止めとく。脱線癖は私の持病。どうにも治らない。

さて人間は、基本的には単なる自然の一部。野生の動物がチョット変化しただけ…。大した智慧もないのに大袈裟な構築物など造り、自然を破壊する。(天空から地上を眺めたら、人間活動の稚拙さに驚かされると思う。国境線などナンセンス。宇宙飛行士は利口だからそれを口にしない。)破壊された自然は、時々その逆襲として、人間の作ったものを破壊し報復する。「浅智慧は怪我の元」。今回の原発事故で、しみじみ実感させられた。些細なことでも縄張り争いは絶えず、強欲を突っ張る。人類とはあまり可愛らしくない生き物。

話を戻し、古代より人々は夜空の星々を眺め、「星座」に思いを馳せたことであろう。そもそも、夜空の星は、3次元の立体空間に無意味に散在しているはず。それを、古の人々は平面座標に鳥瞰

し、絵を描くように、星の群れに名前を付けた。オリオン座、おとめ座、双子座など。

現在、**星座の数は88座**もあるという。

夜空の星を眺めたら、全宇宙を一望で見渡した気分になるかも知れない。しかし、考えてみたら、今、目に見えるのは、天の川銀河のほんの一部に過ぎない。我々は夜、星を見ているけれど、昼も天空には無数の星があるわけだから見ているのは、2分の1。そして地平線・水平線の上を全部見たとしても、その裏側があるわけだからこれも2分の1。そして我々は北半球から見ているので、南半球もあるわけだから、これも2分の1。

更に、天の川銀河は、厚さ1.5万光年の凸レンズ型の円盤状をしており、円盤の直径は10万光年。外周のハローを含めると直径は15万光年である。そして我々の太陽は、渦巻き銀河の数本ある腕の一本の端の方(中心から3万光年)に位置し、銀河の中心(いて座の方角)を、2.5億年かけて1周する。太陽が前回この位置にあつた時、地球上では、恐竜はまだこの世に出現していなかった。

【恐竜の出現は、中生代三疊紀の後期、2億3千万年前。そして、我ら哺乳類は爬虫類から分岐したと言われ、出現は2億年前と言われる。】

そんなわけで、地球から、星の数2千億個あるといわれる天の川銀河を眺めれば、我々が天空に眺めることのできる星の数は、天の川の向こう側は、手前の星や星間物質で視界を遮られるので、全く見ることはできない。それゆえ、視界に入る星の数を、仮に2千個とするならば、我が銀河系内の実に1億分の1の星しか、肉眼や100倍ぐらゐの双眼鏡では、見ることができない。

現在、NASAの発表によると、我が太陽系以

外の恒星の惑星（系外惑星）は1235個も観測されている。その内、主星と惑星との距離・質量などの関係から、液体の水が存在し、生命が存在しうる岩石惑星は既に45個見つかっている。理論的にはこのような惑星は、我が銀河系だけでも、100万個はあるはずと言われる。ならばいずれそのうち、異星人とのコミュニケーションができるのでは？ などと夢が膨らむ。しかし、宇宙のどこからも、人工的な電波は傍受できないという。

さて、この天の川銀河系内で、太陽に最も近い恒星は、初夏の夕方、南の地平線に見えるケンタウルス座のアルファ・ケンタウルスである。その距離は、約40兆km。即ち、4³光年の距離である。仮にその惑星に知的生物があり、地球の人類並の文明を持っていたとして、あちらから来るにしろ、こちらから行くにしろ、その間を単に往復するだけで⁶光年を要する。その距離は、81兆kmである。仮にマッハ50（音速の50倍）太陽系脱出速度¹¹「第3宇宙速度」。時速約6万kmで、光速の約1万8千分の1に相当）のロケットで、この間を往復するとしても、結局16万年かかる。先方が地球より1千万年ぐらい文明が先行していたとしても、仮にマッハ200なら、4万年かかる。

燃料・食糧・医薬品・生活物資・観測機器など積み込み、世代も交代（1代25歳なら6400代）するから、近親結婚を避けるだけの人数（最低、男女計500人）でスタートが必要。宇宙戦艦ヤマト何万艘もの船団を組まなければ、これだけの荷物・人数を運べない。そう考えると、いかに知能の進んだエイリアンがいたとしても、おいそれと地球近辺をうろつくわけがない。UFO出現の話は、あくまでも、それはフィクション。

されば、何のためにこんな大旅行をするか？ なんのメリットがあるのか？ 少なくとも、相手側から見れば、この地球は、何の魅力もなからう。人間とかいう変な動物が異常繁殖していて、むやみやたら環境を汚染している。どちらを向いても危険なオモチャだらけ。みんな利己的で、自分さえよければそれでよし。異常なほど縄張り根性が強く、至る所でケンカばかりしている。こんな所に多大な経費と時間をかけてやってくる。「もの好き」は、この広い宇宙といえどもまずあるまい。

こちら側にしても、この地球と殆ど同じ環境の惑星など、そうそう見つかりはしないだろう。もしあったとしても、いかにしてそこまで辿り着くか。無秩序繁殖をして、地球が狭くなつたからと言って、ハイッそれでは他の惑星に移住：そうは問屋が卸さない。70億人はすぐ100億人になる。

もし人類は、智慧ある動物と言われたいのならば、危険なオモチャを排し、経済至上主義に終始符を打ち、無謀開発を止め、心静かに、生活態度を、もっと緩やかなものに改める必要がある。

新幹線を「馬車」に乗り変えろ！ とまでは言わないが、それぐらいの覚悟がなければ、我々の子孫に、この地球を安住の地として、引き継ぐことはできない。

旅人（4）

小林幸枝

沖縄旅行記、第四回目。

八月十八日、海中道路で与勝諸島巡り。海中道路の左右は太陽に照らされた青い海が輝き何とも

幻想的な美しさだった。

○平安座（へんざ）島

女性だけで踊る伝統芸能ウスデークが傳承されている島であるが、現在は石油備蓄基地が島の大半を占めている。

○宮城島

サトウキビ畑が広がるのどかな島。高台からの眺めは絶景である。集落には昔ながらの民家がたくさん残っており、沖縄を強く感じさせてくれる。

○伊南島

マリネレジヤの盛んな伊南ビーチやサーキット場、リゾートホテルがあり、観光客にも人気のある島。青空と左右どちらを見ても眼下に広がる美しい海が印象的だった。

○浜比嘉島

沖縄の漁村、という風景が素朴で神秘的な感じを見せている。この島は、アマミキヨという女神とネリキヨという男神がすんでいた島と言われている。

世界遺産の勝連城跡に向かっていたが道を間違え敷地島に行ってしまった。まっすぐな砂浜の道を進んでいるうちに行き止まりとなつてしまふ。迷いながら勝連城跡に到着する。

○勝連城跡

十一〜十二世紀に作られた城で、勝連一帯を繁栄させた十代目城主、阿麻和利（あまわり）が最後まで住んでいた。本丸からの眺めは絶景で、世界遺産にも登録されている。

八月十九日。

○辺戸岬

沖繩本島最北端の岬。かつて日本復帰の集会在開かれていた地であり、祖国復帰闘争記念碑がたてられている。

○ヤンバルクイナ展望台

辺戸岬近くの高台にある巨大なヤンバルクイナの形をした展望台。リアルでちよつと怖いのが、そこからの眺めは最高である。

○大石林山

二億年の時を経て姿を現した巨大な奇岩奇石が林立する絶景。聖地アシミイとも呼ばれる沖繩最高峰のパワースポット。

○比地大滝

片道約1.5キロの遊歩道を歩いて行くと、約25.7mの落差のある比地大滝にたどりつく。三十分ぐらいで着くかと思っていたら一時間以上もかかってしまった。延々と階段が続き、登るには相当な体力を必要とした。

八月二十日、那覇。

この日は一日宮古島の友人と一緒にのんびりとショッピング。夜は友人たち大勢が集まりバーベキュー。たくさんの新しい友人ができた。沖繩の人たちは実によく飲むし、強い。バーベキューが終わると二次会に繰り出そうという。私はこれ以上飲み会に付き合おうとダウンしてしまうのでパス。しかし、みんなよく飲むし強いです。

八月二十一日。沖繩最後の日。

○ガンガラーの谷

生命の神秘をたどる旅「森の賢者、大王ガジュマル」悠久の聖地を守る森の奥深くに佇む賢者。

長い沈黙を破り、いま私たちに語りかけている。識名園（世界遺産）

王家の美しい別邸であり、外国使臣の接待にも使われていたという。琉球を小国と思わせないために海が見えない造りになっている。

沖繩に別れを告げる時間になってきた。宮古島の友人が先に出発。そして私が出発。お別れは何となく感傷的になってくる。友人たちとはまた来年会おうと約束してタラップに向かう。久しぶりに充実した夏休みを過ごすことができた。

種を播いてくれた人

伊東弓子

秋桜が咲き乱れる十月、師は故郷へ帰って行った。花は師との別れを愛しむかのように何時までも咲いていた。

五十余年を玉里の社会教育、文化活動に力を入れてくださった人だ。文化センターの愛称「コスモス」の名も、ホールの大幕には滝平二郎さんの切絵から「花咲山」「秋の玉里の風景」も、昼のチャイムに流れる「玉里音頭」の歌も纏めていく大きな力になってくださった。また捨てられそうになった「玉里尋常小学校」のレンガの門と看板やその他、壊されそうになったものをどれ程守ってきてくださったか計り知れない。玉里の先人、生活している人達、この土地を大切に考えてくださった結果だと思う。私達はその中に含まれてきていた。

行かれた後、暫く暖かい日が続いた。やがて木

枯しの吹く季節がくると淋しさが増すことだろう。この地で一生の大半を生活した私にとって師の存在は大きかった。この機会に故郷のことを振り返ってみたい。

終戦後十年、小学生だった頃は戦前の催しが多く残っていた。祭り（必ず相撲が行われた）盆おどり、神仏の縁日は賑わっていた。芝居小屋がたつて任侠もの、人情話が多く、近所隣り連れ立って見に行った。若い人達の楽団の演奏、女性の歌手など大人達がどさ回り一行が来ると楽しみにしていた。星空劇場と言って農協の広場や校庭に箆を敷いて、箆で囲い木戸銭をとっていた。学校の運動会は部落あげての楽しみ、学芸会も三教室をぶち抜いても入りきれない程の人だった。（後で解ったことだったが観客の大半はおじいさん、おばあさんが主で嫁である母親は見にいけず野良仕事をしていたと聞く）高浜小学校、東大橋小学校、小川小学校、玉川小学校との交流も持ち回りで行われた。その一つ一つが、当時一緒に交流した一人一人が思い出される。

三十年代は青春時代だった。人口増加と食糧不足の時期、生産活動に力が入った時代だった。民主主義の風が地方にも吹き出した時代だった。より豊かな生活をめざし、自由な表現活動を求めて若い人達の強い繋がりが育っていた。農村、漁村、山村、職場でも学生も「みんなの力で」を声に学び合っていた。青年団活動、組合活動、学生運動も盛んになっていた。玉川地区では青年の文化活動が盛んだったと聞く。読書、演劇、短歌、彫刻などの活動は生活改善などにも発展したという。田余地区は小坂橋先生（寺の住職）の所に小・中学生が勉強に来ていたが、青年達とも一緒に社会の事や人生の事を語り合う塾でもあったという。当

時役場からの呼びかけで青年学級が出来そのリーダーに小坂橋先生がなった。コーラス、生花、お茶、お作法、放送劇などが行われていった。メンバーは同じ地域の青年達、夜や雨の日を利用して自主的に活動を進めたが、特に女子の親の中に「親方日の丸」という考えもあり女子の出席は青年学級の方への参加は多かった。農村にまだまだ若者が沢山いた時代だった。近く石岡、玉造の青年との交流は勿論、県内、県外の先進地へと広がっていった。若者に夢が溢れていた時代だった。

終戦から二十年過ぎた四十年代、大人達の中に稼げに行き始める姿が目についた。娘達は和裁、洋裁を専門的に習い始めたり、就職へと農村を支える力から離れていった。

四十一年三月新しい教育を受けた私達と同年の社会教育主事という肩書をもつその人がやってきた。公民館で歓迎会の席に奥さんと並んで座った二人は新婚ほやほやだった。私など生まれてからこの地を離れたことのない井の中の蛙、この二人は勇氣ある人だと感心したことを覚えている。自主的に活動を進めてきた私達にとって役場からの押し付けではと心配したが、その人の考え方はそうではなかった。ぼそぼそと語るその人の指導は決して押し付けではなかった。学ぶことを重点に筋書きをつけて考えさせる指導であった。声を掛け合いみんなで進めることを柱にしていた。玉里の社会教育、文化活動は素晴らしいと参加してくれる他町村の人が多く参加してきた。

その人の五十余年の中でいくつかの出来事があった。保育園、小、中学校PTA活動もあり方や内容も学習し、講師も型に填った人ではなく、地元

の芸術家、農業指導者、県内歴史上の人物など地域や時代との係り、人間の生き方、子育てを話してくれるような講師を紹介してくれた。

婦人会活動の中でも村内の先輩夫人から話を聞いた。ハイキング、史跡を訪ねたりと内容を深めていった。若妻会の名のもとに新婚の女性のグループを立ち上げ、子育てのことや読み聞かせもとり入れていった。

老人会と会員減少しつつある青年会との結びつきなども計っていった。

社会教育の仕事から議会事務局や企画課へと配置替えになった時「元に戻して欲しい」と署名をしたり、嘆願した。でも能力を充分生かされてその部署になくはならない人だったときいた。

ある議員の手落ちを被せられ酷い目にあつた事がある。恐ろしい事だった。金所者と冷たい目で見、批判する大人達の群があつた。そんな事に屈する人ではなかった。

そんな中でも地域の中で、学び合う事は続けられていた。

定年後合併前の「村づくり」「村内の石仏」の本づくりの間違い箇所訂正や補足直しに奔走した時間は大変なものだった。地域のものを作り上げるのはやはり地元の事を確りと知っている人でなければと改めてその人の力を知らされた。本당にご苦労だった。結局、二つの本の作成者は村で依頼した遠くにいる「先生」という方達だったからその尻拭いをさせられたと思つていて。

仕事は離れても「花だいの会」「九条の会」に力を注いだり、玉里の史蹟と自然を護る会で「六井」の作業に汗を流し一緒に活動を共にした社会教育者だった。とても尊敬出来る人、人とし

て大好きな人です。他に優しく自分を確りと持つている人なのに、ただ一つ煙草を止められない事が私の目には滑稽に写るのですが、それが人間味を強く感じます。

その人の家の玄関には、故郷の山々と早苗が水に映る田園風景(自筆)が飾られています。そこへ帰られたのです。

良い指導者を失った今、播いて下さった種の芽を私達が育てて沢山の花を咲かせるのが役目だと思ふ。今の状況を見詰めてみよう。身近な地域から広範囲となつて車がないと活動が出来ない。地域の中の組織や生活活動はなくなり、学習が好まれなくなつて仲良しグループ、趣味的な活動が増えた。向上心から競争となつて人間関係が不味くなる事に気がつきたい。コミュニティ、地域おこしと言われながら、一部の人の活動になりがちで、一人でいくつも掛け持ちしている。リーダーの後継者がいない。会員が増えないと嘆く。沢山の問題を抱えているが活動を通して一人一人が豊かな心を育てていく事を柱にしていけたらと願う。

コスモスのある所は、流れ海といわれた今の霞ヶ浦と台地の豊かな産物に恵まれ、人々が多く暮らしてきた所、古代に村一番大きい権現山古墳が造られた。府中国府への航海路でもあつた。戦国時代の出城の一つ館城や稲荷神社もある。江戸時代には「玉里御留川」の中心である。故郷を地域を文化を歴史を耕してきた人々のいた所だ。これから私達がそれらを引きついでいくのだ。と気負つてはいるが、師の去つてしまわれたことは現実で大きな穴があいたように風が通つていく。

当会報六三号より青屋箸について五回目になります。更科公護著「常陸の青屋祭について」より民俗行事としての青屋箸について更科公護氏の原文を紹介しながら、皆さんと一緒読んで参りまして、今回の先月号(当会報六十六号)からの続きは原文、中ほどからのご紹介になります。

『してみると青屋祭にススキの箸を用いることは、茅ノ輪くぐりの神事と同様、新しい季節を迎えるための大祓いの一方法であつたことが考えられる。

しからば常陸の青屋祭はなぜ六月二十一日なのかということになる。これにはまず二十一日はどいう日であるかということを知らなくてはならない。

古い暦法では月の満ちかけに基準がおかれた。すなわち、月の周期を朔、上弦、望、下弦と四分にし、これを一カ月の折りめとして行事を行う日としたのである。したがってついでに十五日、七日前後、二十三日前後に祭りやいろいろな行事の多いのもそのためである。そして一年を二季に分けて同じような行事をくりかえした。茅ノ輪くぐりも六月晦日のほか、古くは十二月の大晦日にも行ったのである。

コヨミが数字的に完成されるとこんどはこれを、上旬、中旬、下旬と三旬に分けられた結果、その第一日もコト日として祭りを行う日としたのである。一日を除いても十一日や二十一日に祭りや行事の多いのもこのためで、したがって常陸の青屋祭はその下旬の第一日ということになる。そこでこんどは青屋祭が六月二十一日になった理由を明

らかにしなければならぬ。

青屋祭が災厄を除いて来るべき新しい季節の安泰を祈る行事であるということはほぼ推定できたが、常陸の青屋祭にはさらにもう一つ深い意義のあることがわかった。それは青屋祭について鹿島神宮関係の文献を神宮の金田敬夫氏にご依頼して調査していただいたところ、たまたま鹿島神宮文書第一輯の中にある井河定久書状に「青屋之清進代官」という文字が出てくることである。これは青屋祭の意義を知る上に最も重要な手がかりになると思うのでその全文をかかげてみよう。

態令啓候、其以来者御無意之条御床敷令存候、
将亦、青屋之精進代官申候仁矢幡安芸守 て候、
此儘来七月十日之御神事之精進二被申付候処、
矢幡家中今日落命二候、就其者如何之由被存候、
扱亦此上別人成共代官二可被申付候哉、御内儀
可承届之由被申候正印迷惑可為職察候、又ハ
万々貴殿へ可被任申候哉、委細可被頭御報候、
何辺可然様頼入外無他事之由被申事 候恐々
謹言

潤六月十七日

井河下総守

定久(印)

江

神主殿

参

書状の概要は、矢幡安芸守が青屋之精進代官の任だが、学中に落命した者がため、七月十日の神事に奉仕不能だから別人に申しつけられては如何という神主あてのものであるが、残念なことにこの文書には年代が記されていないのでいつの時代かはつきりしない。しかし文面から推して戦国時代であることにはまちがえない。そこで閏六月は

そうたびたびくるものでないので、慶長からさかのぼって応永まで調べてみたら次のとおりである。
慶長二〇年(一六一五) 文亀一年(一五〇一)
永禄一年(一五五八) 寛正四年(一四六三)
天文八年(一五三九) 文安一年(一四四四)
永正一七年(一五二〇) 応永三二年(一四三三)

ここで再び前に戻って新編常陸国誌の青屋箸の中の「元コレ府中ノ青屋祭ヨリ出タリ」について考えてみよう。

府中(現在の石岡)は古く常陸大掾の拠城の地である。鹿島神宮の大祭には往古から奉幣使がたてられていたが、二条天皇の長寛元年(一一六三)から勅使の差遣は止み、常陸大掾家から大祭使役を出すことになっていて、そのころはすでに七月十日となっていた。そうすると書状の主、井河下総守というのは常陸大掾の家臣にちがいない。しかし常陸大掾は天正十八年(一五九〇)清幹のとき佐竹氏に敗れているから、閏六月も永禄元年以前のものとといえるが、それより一三二年前の応永三三年(一四二六)に満幹の時、六月二十一日のちようど青屋祭の日に水戸の馬場城が落ちているのでその前年、三十二年が閏六月に当たり、あるいはこの年であつたのかもしれない。永禄と応承間の年代の詮議はそれほど重要でないのでさておいて、ともかく七月十日の神事は佐竹氏に滅ぼされるまで厳修されていたことがこの文書によつて明らかである。

ではその七月十日の神事というのはどのような神事かという点、これは有名な三輯退治と御船祭で、「鹿島神宮七月上旬之神事」として鹿島神宮社例記には次のように記される。(以下次回に続きます)

当会報六十二号にて石岡には青屋祭りという神

事が行われた神社が二社ある事をお伝えしました。その一社である高浜神社においては青屋祭りの起こりとされている。そして神事後の直会（なおらい）に「ススキ」を箸にして「ウドン」を会食した事から、端を発しているであろう青屋箸について、現在の高浜神社においてはどのように行われているか尋ねてみた。ところが予想に反して、神社のある町内では現在七十歳代位の方迄は「存じない」との事であった。しかし毎年七月に行われる高浜神社の祭礼は祇園まつりまたは青屋さま祭り（主に長老のかたが云っている）といわれ名残りをとどめてるようです。

一方、もう一社の青屋神社については、時代と共にこの青屋祭りは国府構内に移され、鎌倉時代の府中城においては城内に祭事毎に青茅屋で設けられた齋殿で行われた等、国府官人の子孫の税所家（府中六名家）が明治年間まで伝統のまま祭祀奉幣の典礼を続けてきました。そして明治中期に社殿として設けられた青屋神社は現在でも町内氏子会七十人によって神社内で行われ、ススキの箸でウドンを頂く直会は続けられているそうである。

今年はとてつもない悲惨な災害がおこり、原発事故の恐ろしさも知りました。被災された皆さん、そして日本中の皆さんが悲しみを秘め、「絆」のもとと一歩一歩前進しています。来年こそ笑顔と幸せが満開になりますよう心よりお祈りしています。一年間のご愛読とご支援、ご助言誠に有難うございました。

・散髪されて梅の本 龍に似て

・悪霊災厄退散 龍に託して ちえこ

《特別企画》

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光（一）

民主主義の本場であるアメリカ合衆国では国内

の猿にも平等に何かをさせようとして車の操縦を任せ自分は寝ていた男がいた。交通量も少ない西部砂漠地帯に続く一本道での出来事らしい。幸いに日本では民主主義が良く理解されていないので「モンキーハイウェイドライブ」を楽しむ？馬鹿も居ない替わりに優れた政治家もいない。国民の代表選を安直な人気投票で代用するから、数多くても役に立つ人物が少ない。この際に、思い切って国会議員の半分を利口な猿にした方が安上がりではないかと思うことがある。

国民が自由にモノを言えなかった時代には誰かが書いた本が多くの人々に大きな影響を与える。幕末の、いわゆる「尊王攘夷派」の人々を啓蒙したとされる著書は、筑波山麓の小田城で書かれた「神皇正統記」を筆頭に、水戸光圀が書き出して水戸藩の事業となった「大日本史」、そして頼山陽が著した「日本外史」などが挙げられる。茨城県はそのうち二つを出しているから、勤皇の志士が多かったようで、その分、思想的に思い込みの激しい者同士が対立して混乱がひどかった。

神皇正統記は南朝の後醍醐天皇礼賛記事である

うから現在の北朝系天皇家には失礼になるので問題外として、大日本史は、壬申の乱で天武天皇に敗れて皇統から削られていた大友皇子の弘文天皇を復活させたことが最大の功績であろう。記録されたことが本当か嘘かは別にして、歴史を武士中心に捉えた著書として知られるのは日本外史であり登場するのは「平氏」を始め「源氏、北条氏、足利氏、織田氏、豊臣氏、徳川氏」の政権担当者から「新田氏、楠木氏」など南北朝時代に活躍した武士と戦国時代の主な武将であるから、書かれた内容を絶対視しなければ読物として面白い。

その日本外史の「足利氏後記」に、桓武平氏系後北条氏の項目がある。後北条氏は、応仁の乱が収まった頃に今川氏を頼り、やがて伊豆・相模国に勢力を広げた伊勢新九郎長氏こと北条早雲が興した家であり、数代に亘って小田原城を本拠に関東地方を抑えていて、最後には豊臣秀吉に攻め滅ぼされた。その小田原攻めにより、後述べるが関東、東北に居た中小武士団は大きな影響を受けることになる。石岡に居た桓武平氏系豪族の大掾氏が滅亡したのも間接的にはその所為である。

伊勢新九郎は鎌倉幕府に君臨していた北条氏とは系統が違っても、同じ姓を名乗っていたから区別するために「後北条氏」と呼ばれる。平貞盛の孫・正度（まさのり）から平氏本流と枝別れしたと称しているが、桓武平氏の忠盛（清盛の父）が伊勢平氏と言われていたことから、申告内容が正しいければ常陸国く京の都く伊勢国と伸びた桓武平氏の分流であると主張する気持ちは分かる。

頼山陽は、その「後北条氏」のことを記した日本外史の中で興味のあることを書いている。「：英雄が天下を制するには形勢（地域の地形）が最も大事

である：」という意味のことである。長く延びた日本国の地形について、当時は北海道が未だ売りに出されていなかったので畿内（きない）京の都を中心にし、陸奥・出羽（東北地方）が頭部、甲信地方が背中、関東・東海が胸と腹になり、近畿地方は腰髻（ようでん）腰回り）に当る。そして山陽・山陰・南海以西にいたつては股脛（こけい）脚・足に過ぎない：としていた。これは別に西国のことを軽視した訳では無く「腰髻」の近畿に居て「股脛」を制することは出来るけれども「股脛」の西国から「腹脊」関東・甲信・東海」を制することは出来ない：という意味らしい。しかし明治維新では官軍と称する西国の薩摩、長州、土佐、肥前などが、この文面に怒つて強引に東征して来たように思える。そういう部分でも勤皇の志士たちに与えた日本外史の影響は大きかった。誤解の無いように頼山陽の主張を推測すれば、京都は合戦があれば必ず戦場になる土地であるから幕府を置くには適さない。源氏や北条氏が構えた鎌倉は南北朝時代々室町時代に何度か戦火に焼かれたが、これは内部崩壊であつて西から攻められた訳では無い。京都よりは鎌倉のほうが良いのだが足利尊氏は、それを理解せずに都に室町幕府を置いた。それが誤りである：と。

現代は何もかも東京に集めて置かないと気が済まない「頼（かろうそ）」のような政治家が多くて地方は寂れるばかりだが、日本の胸に当る関東地方の一漁村であつた江戸を「要害の地」として本拠地に選んだのは徳川家康である。その百数十年前に太田道灌が江戸城を築いたのであるが、その地は平安時代の地方豪族・江戸氏の居館跡と言われており、道灌は古河に居た足利成氏（古河公方）に

対する防御の目的で城に改造した。主君である扇谷（おうぎがやつ）上杉定正に江戸城を造つてやった訳なのだが、主君が馬鹿殿で敵の謀略に乗せられ、道灌を暗殺してしまった。

その罰が当たつて上杉氏は滅び、江戸城は後北条氏の手に渡つた。戦国時代、石岡市八郷地区に居た智将・太田三楽斎も一時だが江戸城主だったことがある。徳川家康を遠方に置きたい豊臣秀吉は小田原攻めの後に家康を関東に移した。田舎に押し込んだつもりだが、実は日本の腰部から心臓部に強敵を移してしまつたことになる。江戸に来た家康は長い期間をかけて城の全面大改造を行い凡そ三百八十年に亘つて日本を支配する城にしたのである。ただし家康も、その後継者も幾らかは資金を出したかも知れないが、大部分を服従した大名たちの負担で修築させている。従つて「江戸城は徳川家康が立派な城にした」というのは嘘で、俗な言い方をすれば「：他人の禪で相撲をとり土俵入りまで済ませた：」ことになる。

家康も「けちだが、秀吉もせこい。関東に移る際に「八か国を与える」と言いながら、実際に支配させたのは武蔵、相模、伊豆、上総、下総、上野の六か国であり、当時の関八州のうち安房には里見氏が、常陸には佐竹、結城氏などが、下野には宇都宮、皆川氏が居り、北条の残党も各地に潜伏していたから油断がならない。その上に秀吉は家康の故地である三河、遠江、駿河を始め、甲斐、信濃、尾張、伊勢などの国々に自分の近縁者を配置してしまつた。壮大な嘘をつかれた家康は与えられた領地内で最強の場所に城を築くことにし、小田原城を捨てて源氏ゆかりの鎌倉を考えたのだが家康をなるべく東に置きたい秀吉は、悪質不動

産屋のように強引に江戸を勧めたのである。

頼山陽が「日本外史」を著したのは江戸時代であるから尊皇攘夷思想に影響を与えたと言つてもあからさまに徳川氏を批判する訳にはいかない。そこで「徳川氏正記」の冒頭に「我が徳川氏は：」

と持ち上げたりして世間並に気は使つて書いたらしい。どの史書もそうだが書かれた内容を鵜呑みにはできないけれども日本外史には諸武将の祖先を次のように記している。

① 平氏は桓武天皇

② 源氏は清和天皇（ただし実際は性格に疑問のあつた陽成天皇とする説が強い）

③ 北条氏は桓武平氏の平貞盛

④ 足利氏は八幡太郎義家

⑤ 織田信長は平重盛

⑥ 豊臣秀吉は？

⑦ 徳川家康は八幡太郎義家

大別すると政権の座に居た人物は平家光源氏に限られているようであるが、豊臣秀吉は自分で「俺は尾張の百姓の子だ！」と言つていたので先祖を選べず苦し紛れに「：母親が日輪の懐に入るを夢見て生まれ：」つまり自分を「太陽の子」にした。

政権は握らなかつたが、歴史上で活躍した武将たちは次のように認定されている。

南北朝時代の新田氏が足利氏と同じ、楠木正成が橘諸兄（園分寺建立時代の左大臣）、北畠親房は村上天皇、

菊池武時が藤原隆家（清少納言が仕えた定子皇后の弟）、名和長年が村上天皇など、

鎌倉時代以降では上杉氏が勧修寺系藤原氏（ただし上杉謙信は桓武平系の長尾氏）、

細川氏が足利一族、

武田氏は第三章後編で触れたように源義光流の源氏であり、後北条氏は既に述べた。そして明治維新に大きな役割を果たした西国の雄・長州藩の毛利氏は神話時代に繋がる野見宿禰（のみのすくね）を挙げており、系列人物で源頼朝の政治顧問であった大江広元の子孫にもなる。これらの家系は、あくまでも当人たちの申告であるから、証拠は無い。家系図などは御注文に応じる専門店があったようなので、好きなように作れる。

さて、頼山陽先生にクレームを言う訳では無いが「日本外史」を見て先ず感じることは、関東以西の地で活躍した武将に比べ、地形的に日本の頭部になる奥羽地方の武将についての記述が少ないことである。これは①⑦の政権担当者が…と言ふより、その大本になつた源氏・平家が出身地は東国でも政権に近づく頃は東海から西に居た所為でもあるし、何よりも東北（奥羽）地方とも言われた陸奥国、出羽国の歴史と支配構造に特殊なものが有ったからではないか…と思っている。本来ならば、地形的に日本の頭部に当る訳であるから此処を支配する者が日本列島を掌握する…。

三内丸山遺跡に見られるように奥羽地方には稲作文化を含む優れたものが早く伝わっていたのであり其処には日本国の母体になるようなものが存在していた―にも拘らず、弥生文化の後期から古墳時代にかけて大陸から九州・山陰方面に渡ってきた異邦人たちは、西が海で行き場が無いから東へ東へと侵略を繰り返した。その為に日本の原点であるべきものが失われ、元から住んでいた人々が陸奥、出羽に押し込まれてしまった。

専門家による近年の研究では、同じ弥生人でも

紀元前九百年頃から百年間ぐらいは縄文人との文化的交流があり稲作や祭具、土器などの日用品に相互の影響が認められるらしい。インターネットとは言っても昔のことであるから、記号化したドングリを渡り鳥に運ばせる程度の旧型であったとは思ふが情報の交換が迅速に行われた。つまり先駆的な弥生人は、現在の岐阜県辺りを境として縄文人と東西に住み分け、時には喧嘩もしたけれど一応は平和に暮らしていた。しかし、その後大陸を食い詰めた、コレステロールのような悪玉弥生人が、日本列島を支配しようとなつてもりでも先住民を東に追い込んだものと考えられる。其の場合、征服者が支配下の民に歴史を教える際に「海を渡つて来た時には強盗団でした」とも言えないので全てを嘘で固めて神様の仕業にしたのである。身に覚えの無い神様は「俺は知らないぞ」と叫んでみたが、神社を建立して貰い地域の人々に拜んで貰うと文句も言い難くなつて現代に至っているのではなからうか。そういう兆候が九州から近畿地方を経て徐々に関東に広がった。東海道で言えば、その最東端が常陸国府の置かれた石岡であり、頼山陽先生のお説を借りて人体に例えれば常陸国は頭を支える頸部になる。頸部は重要だが支える頭部の影響でしか動けない。茨城県が首都圏に在りながら独自性を発揮できず固まっている理由はその辺にあるのではなからうか…。

愚痴は止めて日本外史に戻ると「後北条氏」以降に雨後の筍（たけのこ）のように登場する武士たちの中で、東北方面での行動が特記されているのが伊達政宗と上杉景勝である。一般に伊達政宗は、百年早く生まれていれば天下人になれた優れた武将のように言われている。伊達氏は茨城県から出ているので悪く言いたくはないのだが、伊達政宗という武将は実に小細工の好きな野心家で何を考えているのか腹の底が分からない。その為に奥羽地方の中小武士団が酷い目に遭わされる事件が起こる。子供並みに言えば「伊達政宗は嘘つき」なのだ、そのことは後で述べる。

小田原攻めに際しても、伊達政宗は豊臣秀吉に服従する態度が曖昧で不遜であり、石田三成の讒言（さんげん）もあつて、大減封のうえ四国へ飛ばされそうになる。見え透いた空芝居（からしばい）と徳川家康の口添えで助かつたのである。家康の天下になると、政宗の長男は大阪冬の陣の後に十萬石で伊予・宇和島に封じられるが、政宗は本藩として仙台上に五十八萬石で残り、程なく六十二萬石を与えられる。これも本人の腹では百万石を狙っていたらしいから凶々しいところもある。

ついでに触れておくと伊達氏の祖先は藤原系である。藤原北家の祖・房前の末子で桓武天皇時代に左大臣を務めた藤原魚名の末裔を称している。魚名は、桓武天皇の強力なライバルであった水上川継（父親が天武天皇の孫で、母親が聖武天皇の孫）が消された陰謀の犠牲となつて、現代の短命内閣より早く大臣をクビになり無実の罪で九州へ左遷された人物である。その子孫が平安時代末期に役人として常陸国へ来て筑西地区に定住した。源頼朝の奥州攻めに功を顕し、福島県東北部の伊達地方を貰つて故地としたようである。

上杉景勝のほうは、天下に鳴り響いた上杉謙信の姉の子（長尾氏）であり謙信の養子になつた。しかし父親が謙信に背いて暗殺されたため、父親の不忠を恥じて暗い面があつたらしく、それを援けたのがテレビドラマで知られるようになった直江

兼続である。景勝は、やがて豊臣秀吉の家老を務め徳川家康とは同格であったから簡単には家康の下に付くことが出来ず、関ヶ原では失敗した。領地没収が当然なのだが、辛うじて重臣の直江兼続が持つていた分の領地を貰い、会津から伊達氏の居た米沢へ左遷されて家名を残した。

上杉氏も「ふるさと風」第五十一号「興亡の連鎖」その三の資料で述べたように藤原系であり足利尊氏の母方である。尊氏が室町幕府を開き、次男に東国を管轄させた際に執事として母方の伯父たちを置いた。その子孫が勢力を伸ばし、身内で喰い合いをして倒産したから、家来筋の長尾景虎が借金肩代わりをする替わりに「上杉」を継いだ。それが上杉謙信である。ただし、何代か前に長尾の家系が絶えて、主筋の上杉から人が入って継いでいるから元に戻っただけである。

長尾氏は桓武平氏良文流（千葉氏、土肥氏、畠山などの祖）の武士で相模に住んだ鎌倉権五郎景政の子孫と称している。後三年の役には八幡太郎義家に従って金沢の柵で合戦中に右の眼を射られながら、矢を抜かずに敵を見つけて討つたという怖いおじさんである。長尾景虎が「上杉謙信」を名乗っても強かったのは、その遺伝であろう。

甥の景勝は苦勞して上杉を護つたけれども孫の代で後継ぎがなくなり、養子に入ったのが吉良上野介の息子である。吉良家は足利の一族であるから上杉とは縁が深い。養子の母親が先代藩主の妹なので上杉の血統は辛うじてつながった。

東北方面の武将の活躍が、伊達政宗と上杉景勝だけしか触れられていないのは寂しいが、日本外史の「源氏」の項では、まず源氏興隆の経緯を述べたあと「前九年の役」と「後三年の役」につい

て詳述している。その段階で両方の戦役に関わった奥羽地方の豪族・安倍氏と清原氏、そして後に平泉に栄華を誇る藤原氏が登場する。安倍氏は本来の土着豪族であるらしいが、清原氏と藤原氏は、中央から東北地方統治のために派遣された官僚が現地に定住した家系と推定されている。そういう経過で中小豪族になった者は東北方面に大勢居るようである。それらの諸氏については、後で源頼朝や伊達政宗との関わりなどで紹介するようになる。

まずは日本人の元祖として縄文時代を生きた人々への鎮魂を願って歴史的に大和朝廷から迫害され続けた東北地方の古代を探り、さらに章を改めて源頼朝に攻め込まれて滅亡する奥州平泉の藤原氏が誕生するに至った経緯を辿り、そこから伊豆流人時代の頼朝に関わる「千鶴丸激流投棄事件」(第三章)の後日談として明治維新まで東北地方に伝わった話を掘り返してみることにする。それらは日本が未だ民主主義に汚染されなかった頃の言い伝えであるから「嘘」が幾つかは隠れている筈である。それを何の証拠も持たず、好奇心と猜疑心だけでほじくり返すつもりである。

日本の重要な歴史を顧みるときに、嫌でも物語の発端として語られるのが常陸国府の置かれた石岡市が関わる「平将門の乱」である。此の事件は日本の歴史において「武士の登場」という画期的な出来事なのであり、やがて源頼朝の手に依って「幕府」が開かれる…その切っ掛けとなった事件とされている。「将門は頼朝の恩人」とさえ言われるのである。そういう意味においても、石岡市は本来の「歴史の里」として大いに昔を掘り起こしてみる義務が有ると思うのだが、現実には不景気な森林公園程度の「風土記の丘」だけを営業して歴

史に満足している…誠に惜しいことである。

日本外史は「平氏」から始まり、前年で国軍制度の成立を述べたあとに最初に「武士」として登場してくるのが「平将門」である。将門の父親の良将と伯父の国香と、叔父の良文は「鎮守府將軍」に任じられているから、こちらの方が武士の先駆けのように思えるが、これは軍事的緊張に対処するために陸奥国（多賀城→胆沢）に置かれた大和朝廷の軍事機関の長であり、武士とは限らない。陸奥国司の兼任が多く、従五位上の官僚である。

一般に言われる「武士」の定義は「武芸・戦闘を專業とする人々」であり、律令制度の崩壊で崩れ去った古代の軍制に替わって支配的になった私的な武力をさしているから、この条件に合致しているのは平将門である。天慶の乱で藤原秀郷と共に将門を討伐した平貞盛も、その功績により陸奥守・鎮守府將軍に任じられている。

ここで疑問になるのが「なぜ陸奥国にだけ鎮守府將軍が置かれたのか…」であるが、従来の歴史であれば「陸奥や出羽は蝦夷地であり、反乱が多かったから…」と東北地方を悪者にして済ませていけば良かったのだが、日本建国の歴史が大部分は嘘で、建国年代も一千年以上の「サバ読み」があったと判明した現代では「歴史の嘘」も余程、上手につかないとお客さんを騙せないから昔を信じる学者の方々は苦勞をされるであろう。

日本各地に縄文文化の遺跡があり、それに被さって弥生時代のものが残り、その延長に古墳が在って仏教伝来と共に飛鳥、白鳳、天平（奈良）、平安と現在に続く日本の歴史が成り立つところに、古事記や日本書紀で堂々と外来者による征服記事が記載されているのであるから、この国に元から

居た住民が「賊」という名称で、東へ北へと追いつてられていったことは、同盟国アメリカが先住民族を追い出した例を見る迄も無く明白である。その嫌がらせ行為が、いつ頃に始まったのか…。

大日本帝国最後の頃に出版された歴史年表や古事記によれば崇神天皇の十年、これを西暦紀元前八十八年に当てはめた時代に、孝元天皇皇子の大毘古の命おびこのみことや孫の建沼河別の命たけぬなかわわけのみことらを伊勢以東の諸国から陸奥地方に派遣して、服従しない者たちを制圧させた。どのくらいの兵力を率いて行ったか知らないが、この一行は半年ぐらいで伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武蔵、上総、下総、安房、常陸、陸奥の諸国と越前、越中、越後などの国々を平定して帰還した…冗談ではない…橋も道路も出来て居ない時代に、荒れた山野を往復するだけでも半年以上かかる。

それから百八十年ぐら過ぎて景行天皇の二十五年（西暦九十五年）には武内宿禰が北陸から東方の諸国に派遣され国の地形や民情の調査をしている。こちらのほうは現在の美浦村に「陸平（おかだいら）遺跡」が残る「日高見国」に来て「…そこに住む人々は男女とも髪を結び身体に文身（いれずみ）をして勇敢である…」と報告しているから嘘では無いように思う。ただ、一般に日高見国は北海道と思われており、武内宿禰が「此処（日高見国）は肥沃で広大であるから、これを撃ち滅ぼして占領すべきである…」と余計なことを提言しているのが気に入らないし、武内宿禰の没年が二七二年も後になってるのは羨ましい。

武内宿禰という怪しい？人物に拘らなければ、「日高見国」というのは「孝徳天皇の時代に筑波

郡と茨城郡から七戸を分け信太の郡を置いた。

此の地は本の日高見国である」とする常陸国風土記の記事により「ヒタカミチヒタカチヒタチ（常陸）の語源であり―大和朝廷が東北経営の為に先ず制圧した国になる。陸奥国は奥常陸Ⅱ奥日高見であった」とする説が生きてくる。この説を二十年以上前に主張（或る歴史雑誌に発表されたのは、当時、東北大学名誉教授であられた先生である。入れ替わり立ち替わり来た武將たちは、日高見国を拠点として各地に居た蝦夷の人々を征服していったのである。そうすると年代は大化の改新の後になる。これを「歴史の嘘」とすべきか「単なる年代の誤差」で済ますかは自由である。

そして景行天皇の四十年（西暦一〇年）は弥生時代の全盛期であろうけれども、この天皇の年齢が一四三歳、一三七歳、一〇六歳と三説あり、長命な現代でも鵜呑みには出来ないから信用度は低い―その時代に日本武尊（やまとたけるのみこと）が東方へ遠征を命じられた。しかし、その任務の困難性を知り伊勢神宮に居た坐女の叔母さんに愚痴をこぼした。つまり「…父親の景行天皇が東の十二道（大毘古の命が遠征した地方）を鎮圧して来い、と簡単に命じたけれど、これは私に死ねと言うのと同じである…」と。

叔母さんは気の毒に思って伊勢神宮の神剣を貸してくれた。それでも日本武尊は野火に焼かれたり嵐で船が難破しそうになったり各地で抵抗勢力に遭遇したり苦難の連続であった。そして最後は都に近い伊吹山で山の神の毒にやられて命を落としていたのである。日本武尊は有名な賊が恐れられたほどの豪傑だとされる。其れほどの人物でも叔母さんに愚痴をこぼすほど苦勞する東国の制圧が

一八〇年も前に簡単に出来る筈は無いから、崇神天皇時代の話は嘘としたほうが正直で居られる。そして何よりも、昔の田舎芝居の小道具並みなどの幕にも使われる日本武尊は怪しい。石岡付近の伝説でも、その頃は無かった常陸国総社宮の境内で石に腰掛けたら、風土記にある干し海苔工場を視察したり、新治では井戸掘りまでして、行方不明の修理屋を開業し、久慈川で熊並みに鮭の手掴みを披露するなど大活躍である。そのうちに遠征を嫌がっていた息子に代わって父親の景行天皇まで出しゃばつてくるのも不自然―この父子を信用していない歴史家は多い。百歩譲っても、日本武尊とは大和朝廷から派遣されてきた「複数の武將たちの偶像」ぐらいの存在なのであろう。

何しろ日本の歴史はオリエンタル諸国のように石彫の記録が無いから奈良時代に書かれた「日本書紀」か「古事記」に頼るほかはなく、其処に書かれていることが「荒唐無稽」であるのに昭和二十年までは「馬鹿話」を信じさせられていたから、日本列島の先住民族であった縄文人が、いつ頃から東北地方に押し込まれたのか―それも徐々にではあるが、正確に知ることは出来ない。

このシリーズの第一章で述べたように近畿地方に現れた小さな大和王朝が、親分格の九州王朝の命令か、出雲王朝の指示か、或いは独自のマニフェストによる政策か、勢力を広げようとして「東へ東へ」押し出してきた。見方によっては九州王朝や出雲王朝が直に出てきた可能性もある。

素晴らしい嘘で固めた従来の歴史では歴代天皇と治世年代とに矛盾があるから「いつ頃」を決めるのは難しいが、日本最古の箸墓古墳を実質的な大和王朝の創始者である「崇神天皇の墓」とし

た場合、大雑把だが西暦三百年代ぐらいから渡来系王朝による日本先住民の追い込みが徐々に始まったのではないか：石岡市八郷地区には前方後方墳の丸山古墳に崇神天皇皇子である豊城入彦命の伝説が残り、消滅した龍神山には「美和（三輪）の大物主命に纏わる蛇神伝説」が伝わっていた。

常陸国府（石岡）を終点とする東海道などの、いわゆる「畿内七道」が整備されたのが八〜九世紀と推定されており、七世紀頃には大和朝廷の支配区域が福島県北縁から山形市、鶴岡市に抜けるラインまで広がったようである。ラインの北側は「蝦夷地」として目の仇にされていた。そもそも「蝦夷（えぞ）」とは大和朝廷の征服によって本来の居住地を追われた人々のことを言うらしく文字の意味は「蝦」が「ガマガエル」「エビ」―馬鹿にするな！と怒るところだが「夷」のほうは「東方の君子国の人」：どうも最初は「夷」だけで「えびす」と呼んでいたところ、抑圧された住民の反発が強くなり、抑え込みに手こずった大和朝廷の連中が悪口で「ガマ」を付けたのではなからうか：ガマン出来ない侮辱といえる。

畿内七道の整備は後発の大和族による先住民族制圧に拍車がかかった。東海道が常陸国府で止まったのは沿岸部諸国の海洋系縄文社会が比較的早く大和朝廷の勢力下に組み込まれ、都との交流が可能になった為と推測したのだが：それから先は近江から美濃、飛騨、信濃…と続く山岳（森林）地帯になるため山国系縄文人の抵抗が激しく、地形の関係もあって侵略者は苦勞したのである。

七世紀頃は古墳時代の終末期である。県内の勝田に在る虎塚古墳は、船塚山（石岡）、愛宕山（水戸）と共に県内では三か所だけ「国の史跡」に指定さ

れている。虎塚は「装飾古墳」であるが東日本には例が無い「横穴石室前方後円墳」として評価されている。被葬者は蝦夷征伐に来た「田道」と言う人物とされている。それが仁徳天皇（応神大王の子、天皇としては疑問）五十五年（西暦三六七年）と記録されているが古墳築造年代に合わない！これは史書特有の年代誇張であろう。実際には古墳時代末期に常陸国で土着の蝦夷の人々と侵略してきた大和朝廷軍との間に激しい戦闘が行われ、そこで田道が戦死したのである。

戦死した場所は伊寺水門（いじのみなど）で現在の伊師浜「鶉の岬」の近くと推定されている。この時に田道は腕環を巻いて戦っていた。激戦の中で田道の従者が辛うじて遺体を収容し貴重品の腕環だけ外して未亡人に届けたのだが未亡人は悲嘆の余り腕環を抱いて自殺してしまった。このことを聞いた人々は気の毒に思い涙を流したというのだが、良く考えると平和に暮らしていた土地を追い出され、それに抗議したために「賊」にされた原住民のほうに気の毒である。この腕環については太安萬呂（おおのやすまろ）がイソツブ物語に影響されたサスペンス風物語を創作し、仁徳天皇の正妃・磐之媛（いわのひめ）が強い女性であることを強調した「速総（速）別の王と女鳥の王」と言う話を「古事記」に載せている。これに依って「古事記」が嘘であることが証明されてしまった。余計なことをするものではない。

勝者に都合が良すぎる神話の世界のことは無視することにして、大和朝廷と先住縄文人とのトランプを含めた経緯を追ってみると、伊寺水門で衝突があった後の蘇我王朝時代と推定される敏達（びだつ）天皇十年（五八二）、国境と言っても大和朝

廷が勝手に決めたラインだが、数千人の蝦夷の人たちが其処に現れた。何か苦情を言いに来たのだが、朝廷の役人は集団の指導者を呼んで「長いものには巻かれる」という諺を伝え、服従させたと言う。「子孫、長く朝廷に仕わしむ」と記録されているが、以下の記事を見れば嘘と分かる。

崇峻（すしゅん）天皇二年（五八九）七月、蝦夷との国境を定める（閉じ込める）ため近江臣満を東山道に、穴人の臣鴈を東海道に、阿部臣を北陸道に、それぞれ派遣した。次に欽明（じょめい）天皇八年（六三七）には蝦夷から貢物を持って来なかつたので、上毛野君形名（かみつけのきみかたな）を將軍として蝦夷地に攻め込ませた。お中元やお歳暮を持つて来ないという理由で他人の領地へ攻め込む：古代の日本には、そういう珍しい風習があったらしい。

この時に、形名將軍は弱くて簡単に敗れ、最寄りの砦（こた）に逃げ込んだ。これを「かたなし」と言ったかどうか：追つて来た蝦夷軍が砦を取り囲んだので大和朝廷の軍人は逃げ出してしまい、形名も脱出を図った。是を見た形名の妻が「…何と情けない。大陸に遠征した貴方の御先祖が泣きますよ！」と言って、旦那に酒を飲ませ、カラ元氣をつけた上に、自分が男装をして將軍になり、女性たちに弓を射させ、砦の周りで大声を出して蝦夷軍を撃退した。「上毛野」つまり現在の群馬県は女性が強いと言われる淵源であろう。（続く）

『ふ』の『ふ』

看板娘（犬）「うらうら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

（ギター文化館通り）

TEL:0270-93-0000

【風の談話室】

光陰に閑守無し。よって、光陰矢の如し。
今年も最後の号になった。

年々に移ろう時の早さを感じるようになってい
るのはそれだけこちらに終焉を意識するものが大き
くなってきているからであるか。

自分の人生の終焉を意識してなのか否かは別に
して、当「ふるさと風の会」と「ことば座」に関連
してのライフワークが実に忙しくまたワーキング
レベルの上がつてきたことは実に嬉しく、喜ばし
い。6月に5周年記念展を行ってから、何か急に
質が上がってきたように思うのは、手前味噌だけ
ではないように思う。

ふるさと風について最も嬉しく喜ばしいことは、
自分たちの住むふるさとを自慢する人たちとの輪
が広がることである。

風の会のごときは座、そこにギター文化館の木下代
表、オカリナアート＆の野口さん夫妻からの投
稿を頂き、またふるさとこの歴史から物語を書いて
おられる鈴木健兄の毎月投稿、5年間の地道な歩
みが少しずつ評価されてきたようで嬉しい。

そして、今年夏以降「陸平をヨイシヨする会」
の皆様方からの投稿も頂けるようになった。

石の上に5年ということになったが、牛歩であつ
ても確実に前に進んでいることが嬉しい。

社会的には、不幸な大きな出来事の多い年ではあ
つたが、当風の会やことば座にとっては、自分た
ちの足音の確実に聞こえる素晴らしい都
市であったといえよう。

《ヨイシヨな話》(陸平をヨイシヨする会)

舞台への夢

柏木(小峯) 久美子

ことば座との二度目の舞台を作ることに決め
た！

来年六月のことば座公演ではひとつやりたい
ことがあります。それは、ホルスト作曲の「日本
組曲」を創作することです。

編曲はオカリナジヨイの野口さんに頼みまし
た。

この「日本組曲」は私が活動しているミチオイト
ウ同門会(伊藤道郎の作品を伝承している団体)でも発表
したいと考えていますが…。

ホルストはミチオのために「日本組曲」を作っ
たといわれています。(ミチオは知らないままだったさうで
すが…)

前回のことば座公演でミチオメゾードのテン
ジェスチャーを取り入れた作品を作ったので、ま
た挑戦してみます。以前よりいつか創作してみたい
なと思っていました。やっと原曲をダビング
して野口さんに送りました。まだどの部分を使う
かなどこれから考えます。

共演したことで野口夫妻の音楽の世界に共感
し、共鳴して踊れたと感じた。このことは経験し
てみて分かったことで、はじめはヒロ爺のそれぞ
れがそれぞれを演じる…合わせようとしてはダメ
だということばを頭で理解していた。リハーサル
するたびに違う感覚が生れ、イメージがふくらむ
ことに驚きました。

私自身、ヒロ爺やユッキーちゃんとの共演で引

き出されたこともあると思います。それはお互
いであると思う。まだまだ私の中で眠っているも
のがあるということかもしれない。そして、そろ
そろもう時間がないよと教えてくれているのかも
しれない。動ける時はもうあと少しなら頑張つて
みよう。と、この頃感じるので。

陸平の仲間たちが応援してくれているのがな
よりも心強い。

今年には波瀾万丈な年となったが、みなさんの健
康を祈りつつ、来年の抱負となるかな…六月の舞
台を八月の香港の舞台へと繋げていけたらうれし
い。

生きるということ

田島早苗

陸平をヨイシヨする会の仲間の一人がオーナー
になっている一本のリンゴの木が取り持つ縁で始
まった長野県飯綱町の「リンゴ狩りツアー」、一
年前から決まっていた第三回の実施日はあいにく
の雨になった。

寒暖が猫の目のように入れ替わる日々が続き、
読み切れない気温に踊らされて、思い掛けなくふ
くらんでしまった私の荷物。軽装の友の「着替え
は下着一枚だけ」という言葉にも、危惧と羨望を
ない交ぜにした視線を向けていた。

自己紹介が始まったバスの中、参加者中最高齢
だった去年と違い、三歳年上の仲間が参加して
くれたお陰で、ナンバー2の座を獲得して何だかホ
ッとしている私だった。紅葉を眺めながら食べる
はずの峠の釜飯を、バスの中で食べ、一路ナウマ
ン象博物館へ。

昭和二三年（1948）野尻湖の湖底から偶然発見されたナウマン象の歯、これが切掛けとなって現在に亘る発掘が続き地球創生期の謎に迫らんとしている。

今回の東日本大震災で、地盤沈下・地殻変動等々の言葉聞く機会が増えたが、ナウマン象やオオツノジカが生息していた頃の日本は、大陸と地続きだったと考えられ、海底火山の噴火などで地殻が動き、火山灰の堆積で湖が出来、埋もれた動物たちが化石となって現代に蘇った。巨大動物が闊歩していた原始時代、噴火の溶岩や、降灰に埋もれて一瞬に途絶えた命。想像をふくらませて館内を巡りながら、改めて地球は生きていと実感していた。

続いての一茶記念館は、俳句の端っこをかじっている私が、一度は訪れたいと願っていた場所であり、なりふり構わず俳句の宗匠を目指して歩いた一茶の壮絶な生き様の一端に触れることが出来た。「我と来て遊べや親の無い雀」めでたさもちゆう位なりおらが春、等分かり易い一茶の句を愛し、母違いの弟と、父の遺産相続を巡る争いを繰り返していたことは知っていても、漠然と俳句三昧の一生は幸せだっただろうと考えて居た。

しかし、十五歳で江戸に奉公に出た一茶が、ふとした切掛けから始めた俳句にのめりこみ、江戸で俳句の宗匠になろうと努力を重ねながら、忍び寄る老いにおびえ、厳しい現実の壁にぶつかり、尚捨てきれぬ夢にもだえていたその深い孤独には思いが及んでいなかった。

遺産相続の争いにけりをつけ、故郷の柏崎に永住を決意した一茶が帰郷したのは五十才の十一月だった。五十二才で二十四才年下の婦人と結婚し

て晩年の幸せが約束されたと思う間もなく、せつかく恵まれた三男一女を次々に亡くし、六十一才の時妻にも先立たれてしまう。

柏原の大火（1827）で住居を失った一茶は焼け残りの土蔵の中で六十五年の生涯を閉じたが、最後の時に脳裏を去来する思いは何だったのだろうか。生きるこの意味を投げかけてくれるその一生が重い。

天気予報通り思ったよりも暖かい信州に戸惑い、不要になった衣服の数々を邪魔にしながら迎えた朝、雨が降っていた。是ではリンゴ狩りも大変と思っていたら高原の民宿を出発して下っていく内に雲の切れ間が見え始め紅葉の美しさに歓声が上がった。「リンゴ園は晴れているそうです」という幹事さんの報告を受けて、ますます活気づく車内。

リンゴ園の入り口に止めたバスが動かなくなると男性四人の力ではどうすることも出来ず、女も力を合わせて動かすことが出来たハプニングを乗り越え出発した車内にはリンゴの甘い香りが満ちあふれ、「私は大きなカブを抜くことが出来たネズミだったよ」等と興奮冷めやらぬ帰路になった。

《ことば座だより》

確かな点を打った年に

しらあひろぢ

2月に陸平をヨイシヨする会の主催する「縄文の森コンサート」に招かれて、朗読舞を披露することとなった。その時に、モダンバレエの柏木久美子さんから小林幸枝と一緒に舞ってみたいとお話があり、こちらとしたら願ってもないことである。「こちらこそ是非に」と即断に決まったのであ

た。それが切っ掛けとなり、6月公演ではこちらから柏木さんに共演をお願いした。

小林には大変大きな刺激を頂き、これまでやや伸び悩みだった舞技が突然に大きな伸びを見せることとなった。小林の舞技の伸びは、6月公演の時よりも11月の5周年記念公演で花開いてきた。柏木さんから偷み得た表現スケールを、ギター文化館ならではのクラシックギター（ギタリスト・大島直さん）との初共演で見事花開かせたのであった。

6月の公演時であった。柏木さんより香港公演の話があるのだけれど、イトウ同門会と一緒にやりませんかとの打診を受けたのであった。チャンスがあれば何時でもOKと二つ返事に答えたのであったが、その話が今具体的に動き始め、三月にはその前哨戦にあたる公演をやることとなった。

次号には詳しい話ができるだろうと思います。何事も他力本願にせず、自力たれと歩んでいけば、小さくとも確実な前進の点を打つことが出来るものである。

大晦日まではまだ間がある。いろいろなことが起り、いろいろな問題が生じてきた一年ではあったが、自力たれとに声し、歩いていけば夢の見える明日が来ることを信じる以外ないだろう。

(つづ)

編集事務局

〒315-0001

茨城県石岡市石岡13979-2

電話 0299-24-2063

(白井啓治)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中!!

当ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

- ◎募集要項
- 募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
 - 募集人員：5名程度 ※面接及び朗読と簡単な表現試験有り
 - 養成期間：1年間（入塾は随時受付けています）
 - 指導月4～6回
 - 受講料：月額20,000円（全・半納割引有り）
 - ※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当:白井)までお問い合わせください。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、
また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

ギター文化館

今年も残すところ僅かとなりました。
来年はギター文化館創立20周年を迎える事となり、
一層の充実を図ってまいります。

2012年のCONCERT SERIES

どうぞご期待ください。

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎0299-46-2457 Fax 0299-46-2628